

リスク認知についての研究

阿部研究室 16L1006K 金澤千枝里

1. はじめに

私たちの生活には多くのリスクが存在している。そのような中で、私たちはリスクを過大視したり過小視したりと、正しく認知できていないことが多々ある。これは、リスクの本質が不確実性にあることと、人間の認知能力の制約によって生じていると考えられている。先行研究ではリスクを判断するために使われている様々な要因が検討されているが未だ一貫した結果は得られていないため、まだ検討されていないリスク認知の側面があると考えられる。本研究は、どのような環境でどのようにリスクを認知しているのかを探ることで、リスク認知の新たな側面を見つけることを目的としている。

2. 調査 1

2.1. 目的

個人の持っているリスクに関するエピソードを掘り下げることによって、リスク認知の新たな側面を見つける。

2.2. 方法

参加者： 21～27歳の男女5名(出身：高知，京都，埼玉，山形，福島)が参加した。

手続き： 東日本大震災をテーマに30分から1時間程度のインタビューを1対1形式で実施した。東日本大震災が起きた当時の状況を聞いた上で、災害前後と現在の意識や行動の変化について話してもらった。なお、細かい質問項目は設定せず、基本的に自由に話してもらい、インタビューの話の中で出てきた詳しく知りたいことに関して更に質問をする形式をとった。

2.2. 結果と考察

実際には経験していない事柄でも、リスク認知の変化が見られた。山形出身者は、テレビで報道された高台からの映像を見たことで、以前は考えなかったリスクを大きく感じる一方、闇雲に怖がるのではなく現実的にリスクと向き合うようになっていた。京都出身者は、映像を見ても特に認知が変わらなかったが、実際に津波の高さを表すモニUMENTを見たことで、津波というリスクを認知することができるようになっていた。このことから、直接被害を経験していなくても、何らかの情報を得ることでリスク認知の仕方が変化することが考えられる。

3. 実験 1

3.1. 目的

調査 1 に基づき、持っている情報によって、リスク認知の仕方が異なるのかを調べる。

3.2. 方法

参加者： 19~25 歳の男女 36 名が参加した。

手続き： 火山の噴火に関する意識調査として、質問紙上での回答を求めた。最初に噴火の経験の有無と噴火の知識問題を出題し、リスクの大きさを 7 段階の SD 法形式で評価させた。次に、それぞれ 9 人ずつ、①情報なし、②事象情報、③防災・減災情報、④エピソード情報の内容を提示した。その後、②~④に関しては再度リスクの大きさを評価させた後、全員に、恐ろしさ因子と未知性因子を構成するリスクのイメージ尺度を 15 項目あげ、7 段階の SD 法形式で評価させた。なお、この 15 項目は Slovic(1987)のものを引用した。

3.3. 結果と考察

リスク認知の大きさをはかるため、リスクの頻度と強度を 7 段階で評価させたものを掛け合わせた結果が表 1 である。情報を与えた後のほうが、どの条件もリスクを大きく認知していた。しかし、情報の違いによるリスク認知の大きさに違いは見られなかった。

リスクイメージについては、各項目について図 1 のような結果が得られた。事象情報では、「世界的に大惨事」の項目が 6.00 となっており、防災・減災情報が 4.44、エピソード情報が 4.56 であることと比べると、より「大惨事である」と感じていることがわかった。これは、情報が普段目にしないような大きな数値で提示されていたため、被害を大きく見積もったのだと考えられる。防災・減災情報では、「リスクの軽減が困難」の項目が 4.33 となっており、事象情報では 5.44、エピソード情報では 4.89 であることと比べると、より「リスクの軽減が容易である」と感じていることがわかった。これは、どのようにすれば身を守ることができるかの情報を得たからだと考えられる。エピソード情報では、「受動的」の項目が 5.89 となっており、事象情報では 4.56、防災・減災情報では 5.11 であることと比べると、より「受動的である」と感じていることがわかった。これは、被災者視点で噴火

表 1. 情報の提示前後の
リスク認知の大きさの比較

	前	後
情報なし	23.56	—
事象	19.78	33.56
防災・減災	29.67	34.33
エピソード	26.44	31.22

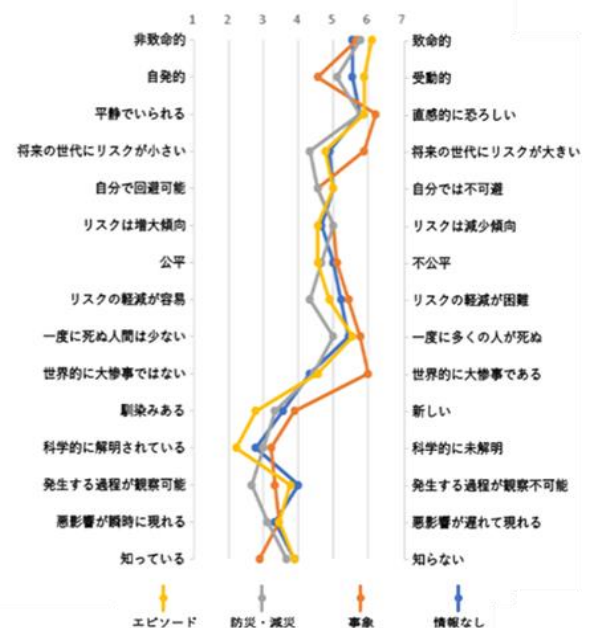


図 1. 条件ごとのリスク
イメージの評価値の平均

の被害が語られていることから、「ある日突然」「どうすることもできなかった」といった無力感が印象に残ったからだと考えられる。

本調査では、情報の違いによってリスクイメージの違いはあったがリスク認知の大きさに違いはあらわれなかった。インタビュー調査でも、人によってリスク認知の変化する情報は異なっていたため、リスク認知の大きさの違いに影響するのは、もっとパーソナリティによるものだと考えられる。つまり、強制的に与えられた情報より、主体的に得た情報のほうがリスク認知の大きさに影響を与えると考えられる。

4. 実験 2

4.1. 目的

実験 1 に基づき、リスク認知の異なる場合、どのような経験や行動をしていたのかを調べる。

4.2. 方法

参加者： 18-65 歳の千葉大生男女 75 名が参加した。

手続き： 台風に関する意識調査として、質問紙上での回答を求めた。最初に、2019 年 9 月 9 日に千葉を直撃した台風 15 号について質問した。当時の場所、被害状況、身近な人の被害状況、備え、台風通過中の行動、印象に残っている報道を、それぞれ記述で回答させた。その後、台風 15 号の被害予想、台風 15 号の被害状況、台風 15 号に関する情報の獲得度について、7 段階の SD 法形式で回答させた。次に、2019 年 10 月 12 日から 13 日にかけて東日本を襲った台風 19 号について、台風 15 号と同様の質問を行った。続いて、台風という事象そのものについて、知識の自信度とリスクの大きさを 7 段階の SD 法形式で回答させた。最後に、台風のリスクイメージを実験 1 と同様の質問形式で回答させた。

4.3. 結果と考察

実験 1 と同様の方法でリスク認知の大きさを求め、そのリスク認知の大きさが、①1~16(25 名)、②17~33(18 名)、③34~49(28 名)となる 3 つのグループにわけた。①がリスクを小さく認知しているグループ、③がリスクを大きく認知しているグループとして、この 2 つのグループのリスクイメージの結果が図 2 である。

また、この 2 つのグループに関して、台風 15 号と 19 号でどのような経験をしていたかを分析した。この 2 回の台風で被害を受けた人の割合は、①72%、③68%であり、身近に自分よりも大きな被害を受けた人がいる割合は①48%、③57%であった。被害の経験に大きな差はでなかったため、今回の台風の被害経験がリスク認知の大きさに影響を与えたとは考えにくい。

一方、台風が来る前にあらかじめ何か備えをしていた人の割合が、①88%、③93%と、全体数で見ると大きな差はないが、各台風での割合を見てみると、台風 15 号の時点で備えをしていたのが、①32%、③65%となっており、大きな差がでた。被害自体に差

がでなかったということは、特別大きな被害がでるとされていた訳ではないのにも関わらず、備えをしていたということになる。リスクを大きく認知している人たちが台風15号から備えをしていた理由はいくつか考えられる。リスクイメージの「直感的に恐ろしい」という項目において、①が4.04であるのに対して、③が5.64であることから、より恐ろしいと感じていることがわかる。台風15号以前の経験や、または危険に対して元々敏感な人間性であるため、恐ろしさを感じ、防護行動をとったことが考えられる。あるいは、元々リスクを大きく認知していたのではなかったが、備えという行動をとることで、台風に対する関心が強まり、備えをしなければならぬほど危険なもののだと認知するようになった可能性もある。

また、得ていた情報にも違いが表れた。印象に残った報道としてでてきたものを分類したところ、リスク認知が大きいグループのほうが得ていた情報に偏りがなく、リスク認知の小さいグループは偏りがあった。これは、リスク認知の小さいグループは主体的に情報を取り入れず、メディアでよく取り上げられていたような目に入りやすい情報を主に得ていたからだと考えられる。

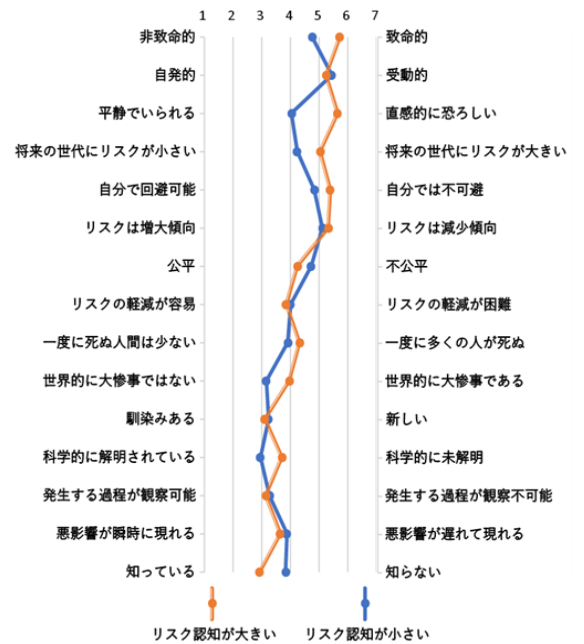


図 2. 各グループのリスクイメージの評価値の平均

5. 総合考察

本研究は、どのような環境でどのようにリスクを認知しているのかを探ることで、リスク認知の新たな側面を見つけることを目的としておこなった。インタビュー調査では、各々が様々な情報を得ていくことでリスク認知が変化していたことが明らかになった。そこで、火山の噴火というリスクにおいて、異なる情報を与えてリスク認知の違いを調べたところ、持っている情報によってリスク認知の大きさに違いはないもののリスク認知の仕方が変化することがわかった。台風に関するリスクにおいては、何がリスクを大きく認知する、あるいは小さく認知するに至らせたのかまでは明らかにできなかったが、備えや得ている情報など異なる行動をとっていることは明らかにできた。これらのことから、リスク認知の新たな側面をみつけることができたといえる。そしてやはり、知識、個人の性格や認知バイアス、経験、リスク事象の特性など、さまざまな要因によってリスク認知は成立していることが改めて示唆され、更なる研究が求められる。

今回は3つの調査ですべて異なる特定のリスク事象を扱ったため、それぞれの結果がすべてのリスクに当てはまることだとは言いがたい。リスク認知はそのリスクの特性も大きく作用していると考えられるからである。リスクの特性への理解を深め、また今回の結果が般化できるのかを調べるためには、本研究の調査を、もっと様々なリスクでも検討していく必要がある。